文化観光を通じた地域の記憶の継承手法について
～ベルリンにおける事例分析を中心に～

The Perspective of Regional Memory Inheritance through Cultural Tourism
A Case Study Analysis of Community Engagement in Berlin

斉藤理*
Tadashi SAITO

Abstract

The purpose of this study is clarifying; what kind of planning methodology, focusing on the importance of regional memory inheritance, is effective for sustainable sightseeing promotion and community design through cultural tourism.

To accomplish these ends, the author of this paper has tried to do hearing investigations, site investigations to some citizen's associations and cultural organizations in Berlin in November 2018 ; Evangelische Versoehnungsgemeinde/ Kapelle der Versoehnung, Koordinierungsstelle Stolpersteine Berlin and Der Verein Quartier Bayerischer Platz, doing pioneering practices of the community tourism field.

It was found; the way of thinking "subdividing monument", analysis into very fine parts of authentic regional history, is effective. And specific effective methods of combining visitors and community residents are : as a first, guided tours by the people in the community, making a base of the cultural tourism. The second, observation highly spectacular past just on the spot of the regional memory. The third, always updating contents of the tourism and cultural activities.

キーワード：観光まちづくり, 記憶の継承, 文化遺産, 文化観光, 市民参加
Key words：Community design through tourism, Memory inheritance, Cultural heritage, Cultural tourism, Community engagement

１：本研究の背景：
欧州で高まる文化観光への関心

近年、とりわけ欧州各地において、文化的交流を動機とする文化観光（Kulturtourismus）への関心が諸方面から高まりつつある。地域経済への好影響を期待する声はもちろん、文化遺産活用の観点からその重要性を指摘したり、あるいは文化観光を契機に地域住民の文化交流を促し、地域の暮らしやすさ、住民生活の質的向上を目指したりといった動きが同調している。さらにこれらの諸要素を総合し、都市戦略や地域再生計画の要に文化観光分野の拡大を位置づけている例も多い。むろん、文化振興と経済開発の両面で効果が期待されることから、世界平和にも貢献する手段としてマクロな視点から文化観光を重視する向きもある。

観光全般でみても、近年、世界の観光業は平均して6.5％増を示す成長産業で、石油、自動車、食品産業などと並ぶ巨大なマーケットを形成しつつあることは、世界観光機関（UNWTO）などの情報から既に広く周知のことであろう。

こうした潮流に比例し、文化観光そのものも拡大傾向にあり、この領域への関心もこれに伴い高まっているが、その際、いわゆる産業としての観光の波に飲み込まれるあまり、一過性の情報消費に終わらせてしまったり、文化観光の本来的な基盤である地域の文化継承過程を阻害してしまったりすることなく、あくまでも文化を軸とした交流機会を持続的に創出していく具体的な手法を確立していくことが求められている。

欧州のなかでも、ドイツにおいては上のような先駆

* 山口県立大学国際文化学部教授　Prof., Faculty of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University, Dr.Eng.

事例が多い。とくに、文化再生をテコに地域振興を促そうと戦略的に動いている旧東独地域では、こうしたケーススタディが盛んである。例えば、2007年に東部ブランデンブルク州の事例などを基に議論が交わされた、文化観光を通じた都市再生に関わるシンポジウムにおいてもその傾向は明らかであった。

ここでは、文化遺産の保護と文化観光の両立を図るべきこと、文化観光の機会を活かしつつ「地域関係者（Lokal Akteur）」と「決定機関（Entscheidungstraeger）」との間の具体的な相互交流をも生み出すべきこと、そのために歴史都市における文化観光の重要性を周知し、その活力（Lebendigkeit）が地域にもたらされた際の経済的評価測定の手法も確立すべきであること、このような将来的な課題が具体的に指摘され、熱心な議論が続けられている[i]。

総じて、文化観光の促進については経済学、都市計画、観光・交通計画、記念物保護、文化政策などの多分野を横断的にとらえ、相互のバランスを複合的に調整しながら遂行していくことが望ましい。こうしたあるべき理想像や方向性は明らかであるものの、そのシナリオを実践すべく実効的な手段に関する議論が今日まで不足している。本稿ではその一助として、文化観光がこれらを繋ぐ媒介としてどのように成り立ち得るのか、についていくつかの具体例から考察してみたい。

２：本研究の目的・方法：文化創出の機会として文化観光を活かす手法とは

文化観光の今後を考える上で、近年、「文化形成のあり方」そのものの観念が変容していることに触れておく必要があろう。この点を指摘するテキストは既に多方面から豊富に刊行されているが、近頃、ベルリン芸術アカデミーがまとめた『文化：都市』を参照すると、文化と都市、２つの領野がどのような接点を持ち得るかについて考察を深めつつ、継続的な文化創出を促すためには、それに相応しいスペースを備えた都市空間のアレンジが必要だとしている。例えば、個々の建築物が、公共に対して閉じられたものではなく、いかにオープンな空間を付加していくことができるか、等々の工夫である。

わけても重要な指摘は、より小さな単位の文化活動に関心を払う、という点である。各家庭や小学校、博物館や街の広場等々で日々実践されている小さな文化的活動こそが、束となって社会の文化をも牽引し、また文化活動に新たな展開をもたらすことを指摘している[ii]。

仮に文化創出の場として、都市部の大規模施設のみを想定するとしたら、小さな文化活動の機会は凌駕されてしまうため継続性に課題が生じる。いわばボトムアップ型の文化（Kultur von unten nach oben）が求められるといい、ここで浮揚するキーワードは、したがって「細分化」である。こと文化交流の一形態である文化観光をめぐっても、コンテンツ・テーマを細分化し、来訪目的も絞っていくことで地域住民も含めた当事者の顔が見える実効性のある事業推進が可能になるのではなかろうか。

本稿では、この仮説を検証するため、ベルリンにおける３つの事例を分析しながら、文化観光の重要な意義である「文化の継承」、わけても「記憶の継承」の問題はどのように解決され得るのか、について跡付けていきたい。

３：ベルリンにおける事例分析

3A：ベルリン・和解礼拝堂（Versoehnungskapelle）をめぐる文化観光の事例

ベルリン市の北部を通るベルナウアー通り。この通りに沿って、30年ほど前までベルリンの壁が走り、地区を東西に分断していた。この一角に現在、和解礼拝堂が建てられている。

この「和解（Versoehnung）」が意味するところは、そもそも同地にあった教会堂の名前（Versoehnungskirche：贖罪教会の意味）に由来するが、冷戦時代にこの会堂が東独当局によって破壊され、ドイツ統一後に再建された後、宗教的意味を超えたより広義の「和解」の象徴として観光交流の拠点となっている[iii]。

経緯の詳細を振り返ってみよう。1961年、ベルリンの壁が一斉に建設された際、19世紀に建てられたネオゴシックの会堂のちょうど目の前を壁が横切り、教会は強制的に封鎖。東側のゾーンに組み入れられた会堂はむろん立ち入ることもできず、長期間にわたって放置されることに。その後、1985年になって、「国境警備のさまたげになる」との理由で、東ドイツ政府の手で爆破。瓦礫もそのままにされるという無残な歴史を辿る。転機は４年後のドイツ統一後。再びこの会堂を、今度は東西分断の負の歴史に対する記念碑的な意味合いも込めて再建しよう、というプロジェクトが動き始めてからであった。

1995年頃より、地域住民も含め検討が重ねられ、今

日見る和解礼拝堂が2000年に完工した。その建設プロセスは大変ユニークだった。広く世界の14カ国からやってきたボランティアの若者たちが一段一段、足で土を踏み固めながら、外壁に該当する円筒状の土壁を徐々に立ち上げていったのだという。果たしてじつに３か月間、人力を駆使して、高さ７m、厚さ60cmの円筒状の壁が完成したという。

粘土質の素材を少しずつ積層させたこの土壁は、したがって縦方向の断面が常に露わになり、会堂に足を踏み入れるとあたかも考古学か地質調査の発掘現場にいるかのような心持になり、今日と過去との連続性に自然と意識が向く。しかも、この「地層」の中には、かつて東独政府によって爆破された教会堂の破片も混ぜ込まれており、ここで文化が一度強権によって破壊され、しかし再び市井の人々の手によって再建されたという記憶が織り込まれているのだ［下写真参照］。

建設時の協力団体（例えばヴァイマールを拠点とする若者たちのグループ「オープンハウス」の協力）とは完工後も友好的な交流を深めているという。

こうした地域住民の様々な想いを具現化し、実際に文化交流のプロセスが共有されたことで、文化観光の最適なコンテンツになるとともに、この記念碑的施設の維持・運営を支援する人的ネットワークの形成に繋がっているという。

このあり様は、例えば、スター建築家といわれるピーター・アイゼンマンが設計したベルリン・ホロコースト記念碑、同様にダニエル・リベスキント設計のユダヤ博物館など、その大胆な造形でセンセーショナルに世界の耳目を集め、連日、多くの観光客を招き入れることができる規模を誇る文化施設とは明らかに一線を画すものである。むしろ、そうした大規模なモニュメントとは対比的な「記念碑の細分化」の方向性を示している[iv]。

和解礼拝堂は、意図的にきわめて小規模に計画され、地域コミュニティが建設当初から深く関わり、建設過程においても世界中のボランティアを惹きつける物語性を持っていた。こうした小さな文化創出活動の舞台になっていることで、持続的な人的ネットワーク拡大に繋がり、ひいてはこれが文化観光のベースを成している。この礼拝堂プロジェクトの示唆的な点はここにある。

① 文化観光を新たな交流創出に繋げる：麦畑化プロジェクト

壁で分断されていた礼拝堂周辺の地域住民同士がより密な交流機会を持てないだろうか、という運営メンバーの思いつきから、会堂脇の敷地でライ麦畑を始めることにしたという。かつて壁で隔てられていた近隣地区の住民が来訪者とも協働しながら畑作業に取り組む企画である。2005年から着手され、毎年10月に種を撒き、翌年７月に収穫する。戦前、この一帯が墓地であったことや、ベルリンの壁付近は一歩誤れば生命に関わる危険地帯であったことなどから、麦が芽吹く様子は平和と和解の象徴的なイメージと重なる。

その後、この話は展開し、この和解のライ麦畑で収穫された種を、かつて西側と分断されていた東欧の旧共産圏諸国に提供し、それぞれ各地で栽培・収穫してもらおうという、和解の思いを伝播するプロジェクトに発展した。各地で収穫された麦をベルリンに集め、皆でパンを焼くという興味深い試みもなされており、これらの諸活動が、この礼拝堂をめぐる文化観光のきわめて魅力的なコンテンツ創出にも貢献している。

かてて加えて、このテーマは発展的に変転を遂げている。「農業基盤が確たるものであれば、互いに争い合う必要のない平和な世界を構築できる」とのモットーから、上の活動は各地への農業支援も実施する「ピースブレッド協会」の設立に発展したのである。東西の和解、という礼拝堂再建当初のメッセージ性は、関係する人々の創意工夫を経て、より広範で発展的なテーマへとパラフレイズしている。

2017年９月には、この会堂脇のライ麦畑を会場に「アートプロジェクト・クロウズ」が実施された。これは芸術家のペチュナティコウ（Natalia und Maria Petschnatikow）が進めたプロジェクトで、世界の多様なカラスたち、しかもなんと総計数百ものカラスの彫刻が麦畑に並び、これが一斉に畑をついばむというインスタレーションを実施。地域住民はもとより、観光来訪者に対し、この礼拝堂の「多様な存在の止まり

木」としての存在意義を知らしめた。

上記のように、記念碑の存在意義や主題、メッセージ性をアプリオリに、ひと通りに規定してしまうことなく、むしろ、その歴史的事象をひとつの止まり木として、多くのステークホルダーを集めることで、文化創出の具体的な源泉になっていく可能性をこの礼拝堂の事例は示唆している。そのための具体的な手段として文化観光（とりわけ案内ツアー）が極めて重要な役割を担ってきた。その効果は、麦畑化事業などのほか、若い世代への教育面でも現れている。

② 次世代への文化継承の機会として文化観光を活かす

和解礼拝堂の今後の課題は、壁による分断の歴史を知らない世代への周知活動にあるという。中高生たちの学校単位での見学も多く受け入れており、近年、この層の訪問者数は増加傾向にあるという[v]。生徒たちからの見学希望があった場合には、解説を担当できる教会教区（ゲマインデ）のメンバー6名程度が担当し、通常、60分から90分程度時間を掛けて、ベルリンの壁に関わる歴史を解説していくという。

近年では、教員自身も冷戦時代の経験が乏しいことから、授業の中で扱わないことも多く、基礎的な情報から丁寧に説明していくことが必要であると感じているという。ただ一方で、その分、未知の情報に触れた新鮮な驚き、例えば「壁のことはなんとなく聞いたことがあったけれども、具体的に初めて知ることができ、興味・関心を強くした」という感想を抱く生徒も増えてきており、これらに接することでガイドメンバーのモチベーションもさらに高まっていくという。

青少年への教育プログラムの基盤を成すのが、この礼拝堂関係者によるガイドツアーで、これに加え、多くの自主活動への助成をしたり、と実り多い発展的プログラムも提供している。

例えば、40代以上の大人たちから冷戦期の体験談を丹念に拾い集め、170頁の本[vi]に仕上げた高校生のグループや、ベルリンの壁の歴史をテーマにしたモダンダンスを創作し、実際に舞台で上演している、という特筆すべき成功事例が蓄積されてきている[vii]。こうした成果については、つい先頃開催されたパネルディスカッション「壁の崩壊ってすごく昔のこと？」（青少年による「ベルリンの壁」調査プロジェクト／会場：2018年11月8日ベルリンの壁博物館）の場で、若者たちが熱意あふれる報告を行った［右写真参照］。

礼拝堂のガイドツアーで見聞したことがらを、単に知識の次元に留めるのではなく、しっかりと咀嚼し、自らに内在化させ次の文化創作に繋げていることは、この礼拝堂をめぐる文化交流が、記憶の継承へと着実に繋がっていることの証左である。

3B：負の遺産を文化観光に活かす:「つまづきの石」プロジェクト（Stolpersteine Art Project）

ベルリン生まれの芸術家ギュンター・ドメニク（Gunter Demnig）が1990年代より取り組んでいる文化事業であり、「記念碑の細分化」の傾向を裏付けるプロジェクトとして以下に取り上げたい。

「つまづきの石」とは、一辺が10cmのコンクリートでできた立方体で、表面にはピカピカに光る真鍮板が貼られ、ナチス時代に犠牲となったユダヤ人等[viii]を記念するため、彼らの氏名、生没年、経歴などが刻印されている。これを、犠牲者がかつて住んでいた住居前の舗道に埋設していくという、これまでにないスタイルで展開される小さな記念碑である。犠牲の歴史のディテールに具体的に接していくことで、ナチスによる迫害を受けた全ての犠牲者を忘れてはならない、との強いメッセージ性が込められている。

① ありふれた日常風景におけるセンセーショナルな記憶の顕在化

なるほど今日、街を歩いていると、時折路傍に金色の石が視界に入り、なんだろうと近寄ってみると犠牲者一人ひとりの個人的な情報を目にすることになるのだが、「何万人が犠牲になった」といった抽象化されたデータではなく、こうした極めて具体的な迫害の実情に迫ることで、日常の何気ない街風景のなかにもかつての残虐な記憶の断片が散りばめられている現実にハタと気づかされる［次頁写真参照］。

こうした臨場感は、例えばユダヤ博物館など大規模な文化施設では感取できない特別な体験である。後者では、個々の場所のおぞましい記憶は、一旦、歴史的

文脈のなかに整理されてしまい、今日の日常風景との連続性を辿ることを難しくしている。それに対して、その場その場が宿している記憶の地層を生々しく顕在化させるという、「記念碑の細分化」がここでは試みられているのである。わずか10cm四方の小さな路傍の記念碑が放つリアリティーの迫力は、大規模な博物館にも勝るといえよう。

こうした「つまづきの石」を探しながら歩くという、ささやかなガイドツアーも地域ごとに実施されており、文化観光の新しい扉を開いている。

多くのツアーは事前予約制で、60分から90分ほど、地域ボランティアの解説つきで見学する、という形式だ。博物館等ではなく、きわめて日常的な風景のなかで、しかも著名人ではなく、きわめて平凡な市民の生涯に触れながら回るという、身近でリアルな見聞の積み重ねは、いうなれば帰納法的な文化理解ともいうべきもので、記憶の現場に赴くことによってのみこの習得プロセスは成立するのだ。

この「個々の記憶の現場に赴く」ことの意義について、ここに少し補足しておきたい。「つまづきの石」プロジェクトのみが特殊解ではなく、今日、記憶の細分化が広く浸透しつつあることを部分的に裏付けることができるだろう。

ひとつは、1996年、芸術家ビーダーマン（Karl Biedermann）によって創作された青銅製の彫刻「見捨てられた部屋（Der verlassene Raum - Denkmal fuer das Wirken juedischer Buerger in Berlin）」である。ベルリン市北部のコッペン広場に置かれている。これは、1943年に同地域から一斉連行されたユダヤ人たちの記憶を捉えたもので、何気ない広場の一角に、一脚の食卓と乱暴に倒された椅子を確認できる。連行直後の室内そのものの表現である。暴力的な軍靴の響きと囚われし人々の叫び、そして、その後の不気味な静寂、これらを一瞥のうちにリアルに感じ取ることができる作品だ［下写真参照］。

近づいて見てみると、食卓の足もとに、ノーベル文学者ネリー・ザックスによる詩「死神の住処で」が刻まれ、これがユダヤ人へのモニュメントであることを、決して大げさにではなく粛々と、しかし強い批難のメッセージを込めて提示している。

今ひとつには、1995年、イスラエルの芸術家ミシャ・ウルマン（Micha Ullman）が手がけた「空っぽの図書館」が挙げられるだろう。1933年5月10日、フンボルト大学前のベーベル広場で、ナチスを信奉する学生達が「非ドイツ的」とみなした「堕落作家」24人の本を焚書したまさにその現場に設置された記念碑である。

広場中央の地面に穿たれた1m四方のガラス窓からおよそ5m四方の地下空間を見下ろすと、一冊の本も入っていないがらんどうの白い書棚が並び、そのスペースは、ちょうど焚書で灰塵と化した2万冊が収まる規模だという。「書を焼く者は、終いには人をも焼く」なるハイネの予言めいた詩の一節も記され、この場に刻まれた負の記憶の意味、それは過去の記憶の表出という次元に留まらず、むしろ今日の私たちが警句として受け止めなければならないことを極めてリアルに示唆している。

こうした、平素、見失いがちな地域の記憶、しかもセンセーショナルな記憶をその現場において顕在化させる試みが近年盛んに行われ、文化観光のコンテンツとしても注目されている。

② 拡大を続ける共感のネットワーク

「つまづきの石」事業は1996年から開始され、すでに欧州各地の路上にのべ6万個も設置されている。ドイツ国内では500箇所以上、ベルリンだけでも総計7,691個（2018年11月時点）埋設された[ix]。この数字だ

けでも、ナチス時代の忌まわしさを伝えるに十分だが、他ならぬ自らの暮らす身近なコミュニティがその舞台であった事実に人々は2度目の衝撃を受ける。

ベルリンのなかでも、同市西部に位置しユダヤ人住民の多かったシャルロッテンブルク-ヴィルマースドルフ区では、3,245個（2018年９月時点）もの敷設が実施された。しかもこれらは、特定の設置者によるものではなく、個々、地域住民による全くの自発的活動（Private Initiative）として進められてきた。石の設置費用などももちろん、民間の浄財によって賄われている。「つまづきの石」の設置数が多いということは、それだけ地域住民の関心も高い、ということの表れであろう。

つい先頃、この「つまづきの石」の敷設式（Stolpersteinverlegung）がベルリン各地で集中的に開催された。その一つ、2018年11月24日、ベルリン西部のランツフーター通りで執り行われた式のプロセスは以下のようであった。

開催の10日ほど前にはベルリン市のウェブサイトにリリース文が掲載され、かつてこの地に暮らしていたブルーメンタール夫妻のための「つまづきの石」を埋設すること、妻は1944年に強制連行されアウシュヴィッツで亡くなったこと、夫はその２年前「ソビエトの楽園」に関わる暴動で殺されたこと等、犠牲者の詳細が紹介された。

当日、予定時刻に会場へ向かうと、近隣住民や地域の小学校の生徒たち30名ほどが集まり、バイオリンの演奏とともに追悼の言葉が厳かに読み上げられていた。そこへ一台のワゴン車が静かに到着し、このプロジェクトの発案者であるドメニクが石とハンマーを両脇に抱えて現れ、じつに淡々と路面に埋設した後、ものの数分でスっと走り去っていった。挨拶も交わさずに立ち去ったこの男性を、おそらく参列していた地域住民の殆どは施工業者の一人と認識していたのではないだろうか。よもや発語の芸術家だったとは気付かなかったと思われる[x]［右写真参照］。

この状況はじつは大変興味深い。すなわち、このプロジェクトは確かにドメニクの着想で始まったが、もはやその想いは広く浸透し、地域ごとの自発的な活動として、自らの文化活動として内在化されている、そのような印象を強く受けた次第である。

この活動は、すでにドイツ各地に広く浸透しているが、とりわけベルリンでは精力的で、地区ごとに計12の協力団体（Lokale Initiativen）があり、「つまづきの石」の設置に関心のある地域住民への相談窓口となっている。ここでは、犠牲者の経歴を調査することを始め、子孫や親族を特定し、相互に連絡を取りながら、碑文の内容を確定していくというサポートを担っている。これらのプロセスはすでにマニュアル化されている。

加えて、石（記念物）の敷設だけではなく、関連するドキュメンテーションも並行して行われ、「つまづきの石」に刻まれた人々の全データは、埋設された住所とともにベルリン市のウェブサイトから紐解くことができる。

こうした情報構築や解説ツアーの提供は、文化観光の確たる土台を形成している。先に触れた各地のつまづきの石のガイドツアーの実施に当たっても、既に仔細にドキュメンテーションされていることでツアー解説の準備負担を軽減し、学校単位での視察・見学の拡大等を可能にしている。

3C：来訪者―地域コミュニティとの直接的交流を創出する仕組みがもたらすもの

上に、ベルリンの壁の記憶、ナチス時代の記憶の継承をテーマとした文化観光の事例を見てきたが、それらに通底するのは、「記憶」の問題をきわめて具体的に扱い、敢えてそれらを統合的に「歴史」の文脈に編集することなく、個々に細分化されたままの状態に留めることで、各々の記憶のリアリティを減ずることなく、その迫力そのままを来訪者や次世代に継承することに成功している。「記念碑の細分化」が功を奏している格好だ。

そこで以下に、最後の事例として、ベルリン南西部のバイエルン地区にて、身近なエリアの記憶を収集し、展示・解説に努めているグループ「バイエルン広場協会」の活動に触れてまとめとしたい[xi]。

このバイエルン広場周辺は、20世紀初頭、アインシュタインをはじめ作家エーリッヒ・ケストナー、映

画監督ビリー・ワイルダーなど多くの文化人が好んで暮らした街で、往時の文化的な記憶に溢れている。これらを文化観光資源として活かし、地域振興（経済的にも文化的にも）に繋げようとしているのが上述のグループである。

2007年から手探りで活動していたところへ、ちょうど同地区の地下鉄駅を改築する計画が浮上し、これに併せて駅上階をカフェ兼地域の歴史を紹介する展示室、さらにグループの拠点として整備することが叶った。建設資金には、宝くじ事業からの補助金などを当て、もちろん行政や交通当局からも、この「地域サロン」プロジェクトへの全面的支援を得ることができたという。

およそ100平米ほどのカフェには、この地域にゆかりの文学作品や短編映画、証言集、書籍や報告書が溢れ、来訪者は、ゆっくりお茶を楽しみながらこれらの文化的息吹に触れることができる。この施設においてもっとも特筆すべきことはしかし、これらの整備状況の素晴らしさではなく、「必ず地域住民が２名、カフェの一角に常駐している」ことである。

午前10時から16時まで、グループのメンバーが2名ずつ２時間交代制で案内コーナーに詰め、にこやかに来訪者を出迎えてくれるのである。展示についての紹介はもちろん、地域の様々な情報を生活者の視点から詳細に、ときに誇らしげに説明してくれる。こうした来訪者と地域住民との間の顔の見える交流機会が常に提供されていることで、この地域の文化観光のあり方にもプラスに影響しているようだ。

例えば、このバイエルン地区では、やはりナチス時代にユダヤ人の犠牲者を多く出したことから、これに関連した解説を希望する生徒のグループが訪ねてきたり、あるいは犠牲者の家族が遠く米国より訪ねてきたりと、地域の記憶の継承というテーマに必然的に深く関わることになったという。

その際、住民の誰かが、地域への来訪者の受け入れ窓口になっていることで、これまでは顕在化してこなかった記憶の断片が有機的につながり、地域の知られざる出来事を浮かび上がらせることができている。女性メンバーの一人で、以前小学校の歴史の教師をしていたという方も、「毎日、来訪者から新たな情報がもたらされます」と興奮気味に話されていた。これらの情報は集約され、地区を回るガイドツアーの解説などに活かされている。

文化観光における見聞が、決して「解説者から来訪者へ」という一方的な情報伝達ではなく、直接的な交流を通して、双方向的に「記憶の継承」プロセスを担うことができる、ということをこの事例は示している。

その意味で、ここでのボランティアメンバーは紛れもなく「文化の仲介者」として機能しており、文化観光においてこの立場の皆さんが果たす役割がいかに大きいかを、この事例から認識することができるだろう。

バイエルン広場協会のメンバーは、60代後半や70代のリタイア後の皆さんが殆どであるが、「（とくに戦時中の地域の記憶について）自らの世代こそが継承していかねば」という思いを昨今強くしているという。

地域における文化観光活動が、来訪者のみならず、地域住民の意識をも積極的なものへと変えようとしている、こうした状況が確認された。

４：総括と展望

本稿では、今後の文化観光に有効な手法を「細分化」を手がかりに模索してきたが、細分化された記憶の継承が独特の文化交流の創出につながり、新たな文化観光コンテンツになり得るという点を跡付けることができた。ベルリンにおける３つの事例調査からはおおよそ以下のような共通項が指摘できるだろう：

4A：ガイドツアーが観光交流の基盤を成している

和解礼拝堂では年間4,000人程度、バイエルン広場のグループの場合で年間400人程度の来訪者を解説ツアーで受け入れているという。いずれも、ツアー参加者の顔を見ながら交流を深める最適な距離感を保ちながら伝えることにこだわり、20人程度の小グループ単位で移動することにしている。

また、つまづきの石をめぐる見学ツアーに顕著だが、ドキュメンテーションがしっかりしていると、解説をスムーズに実施することができ、重要である。

4B：あくまでも記憶の現場に寄り添って活動すること

つまづきの石の活動例に明らかなように、博物館等で歴史を概念的に習得するのではなく、あくまでも個々の記憶の現場に自らが赴くこと（「記念碑の細分化」）が重要である。これによって初めて臨場感を伴う記憶の体験、継承ができ、その教育面での効果も大きい。

同様の理由から、バイエルン広場のグループでは、時代の目撃者（Zeitzeuge）からの証言こそが何よりも真正性を持つ、と重視し、折に触れ語り部の会を催している。

4C：文化観光のコンテンツが常に更新されている

和解礼拝堂をめぐる驚くべき企画の展開ぶりや青少年たちによるテーマの掘り下げ、あるいはバイエルン広場における来訪者と地域住民との間の記憶の交換プロセス。こうした事例から、ほかならぬ文化観光を通じた人的交流が、観光コンテンツそのものを日々多様なものに、より広範で発展的なテーマへとパラフレイズさせていることが判った。

そうした発展の秘訣としては、活動メンバーが文化観光による人的交流・ネットワークの形成にそもそも意欲的であること、また多様なステークホルダーが関与しやすいように、交流プロセスをオープンに（例えば「つまづきの石」の敷設式のような）していること、このようなことが挙げられる。

こうした個々の手法の効果検証なども、今後、より多くの事例収集が叶えば可能になってくるものと考えている。

加えて、今後の展望として、細分化された個々の記憶継承と、いわゆる公共記憶の継承との関係性について整理する必要があるだろう。

例えば、現代の文化的記憶の問題を扱っているコロンビア大学のヒュイッセンは、公共記憶をPalimpsest（羊皮紙）に準えたユニークな書を近年著しているが[xii]、ここでは、歴史上、トラウマの記憶は、芸術作品を生み出す独特の力を秘めていることに言及しつつも、「現代の我々は、歴史ではなく、肥大化した記憶に埋もれているように思える[xiii]」と指摘している。

公共記憶、つまり歴史としての記述と、個々の記憶として個別に扱われ続けなければならない事象との住み分けについて議論を展開させることができると考えるが、これはまた別稿に改めたい。

謝辞：
調査にご協力いただいた、ベルリン和解礼拝堂、バイエルン広場協会の皆様に感謝致します。
また本調査研究は、以下の支援を受けたものである。
平成30年度山口県立大学滞在研修研究費

---

[i] 2007年開催の文化観光に関わるシンポジウム資料：”Dokumentation des Symposiums: Kulturtourismus - Zukunft fuer die Historische Stadt : nachhaltiges und wirtschaftliches Stadtmanagement durch interdisziplinaerers Handeln ; 16. November 2007, Altes Rathaus, Potsdam”, 2009, p.11

[ii] Wilfried Wang ed., "Kultur: Stadt", Akademie d. Kuenste, 2013, p.13

[iii] 和解礼拝堂に関しては、同広報担当ライナー・ユスト氏に伺った話を参考にした（2018年11月６日ヒアリング）

[iv] 同様の指摘は、Adam Sharr（ニューキャッスル大学）によるものもある。
Adam Sharr, Sedimentiertes Gedaechtnis, The sedimentation of memory, in: The Journal of Architecture, the Royal Institute of British Architects （RIBA）, 2010, pp. 499-515

[v] 和解礼拝堂やベルリンの壁博物館の見学を学校単位で希望する場合、壁の文化財団を通じて研修旅行費のサポートが受けられる制度も整備している。

[vi] “Geteilte Ansichten: Jugendliche stellen Fragen zur Deutschen Einheit”, Berlin, 2015

[vii] 2018年11月８日に開催された青少年へのサポートプログラム成果発表会より。若者たち自身が成果を披露する催しで、きわめて意欲的な彼らのコメントに共通していたことは、「壁の話は学校では習わなかった」、「自ら開拓し、情報を集めたことにものすごい充実感がある」という点で、これは、街のなかの記念物が、学校とは異なるアプローチから教育面で貢献できる可能性を示唆しているように思われる。

[viii] ユダヤ人のみならず、シンティとロマ（ジプシーの自称）、フリーメーソン、同性愛者、強制労働者、共産主義者など政治・信条を理由に迫害された人々、あるいは障がい者等に対し行われた安楽死の犠牲者を対象としている。

[ix] 主催団体のwebサイト等の情報から。https://www.stolpersteine-berlin.de/de

[x] 今のところ確証的な情報ではない。参列者の住民何人かにそっと訊ね、そうした状況を確認した。

[xi] バイエルン広場協会に関しては、同会マグダレーネ・レッシュ氏らに伺った話を参考にした（2018年11月21日ヒアリング）

[xii] Andreas Huyssen, "Present Pasts, Urban Palimpsests and the Politics of Memory", 2003： 社会的または政治的に重大な危機に直面したベルリン、ブエノスアイレス、ニューヨークの3都市における20世紀後半の歴史をはじめ、その忘却、さらにニーチェの「選択的忘却creative forgetting」に準えた選択的記憶の継承（公共記憶）の関係性を分析している。

[xiii] Andreas Huyssen, ibid. p. 3